

Cultural Awareness : 異文化理解と英語教育

早 瀬 博 範

Cultural Awareness

Hironori HAYASE

INTRODUCTION

英語は今や世界の共通語として見なされ、その優位性は、1990年のベルリンの壁の瓦解、さらには冷戦の終結、そして最終的にはソ連の共和国への解体によって、高まり、今や、東欧諸国でも英語を学ぼうとしている人々の数が年々増え続けている。従って、次に Smith が言っているように、英語に対する見方も変化し、英語は単なる英米の所有物ではなくて、世界の皆の共有物であるという考えになってきている。

English already represents many cultures and it can be used by anyone as a means to express any cultural heritage and any value system. (Discourse 140)

このような状況を反映して、必然的に日本の英語教育でも異文化理解のための手段としての英語という視点に立って、英語教育を見直さなければならなくなってきている。そこで、本論では、異文化理解のために日本の英語教育において、これからどのような点を留意すべきかについて考察したい。

共通語としての英語と言う視点に立つと、これからの日本の英語教育で考慮すべき点は次の2点に要約できると思われる。

(1) 英語は単に英米の文化だけを知るための言語ではなくて、さまざまな国の文化を知り、理解するための手だてとみなす。

(2) 日本人としての identity を殺すのではなく、理解してもらおう方向を考える。

(1) に関しては、単純なようだが、本質的にはかなりの矛盾を含んでいる。本来、言語は文化と表裏一体である。従って、どんなにしても「英語を教える」ということは、やはり、「英米の文化を教える」ことになってしまう。そこで、今、大切なのは、英語を教えるのではあるが、その際、英米の文化だけにこだわらない、という教える側における「中立性」である。言い換えれば、英米文化至上主義に陥ることのない、バランスのある文化感覚が必要である。

I. Cultural Competence

C. Wallace は、*Learning to Read in a Multicultural Society* (1988) の中で、“cultural competence” を、“a very complex package of belief, knowledge, feeling, attitude and linguistic behaviour” (33) と定義し、その重要性を指摘している。近年 communicative competence の育成が期待されているが、この cultural competenceこそ、その根幹となるものと思われる。そこで、この章では cultural competence の育成のために

どのようなことを留意すべきかを具体的に検討したい。最も、文化能力の育成といってもそれをすべて英語教育が担う必要もなく、またやれるはずもない。ここでわれわれの考えるべき範囲は、やはり言葉に関する、あるいは、言葉を通しての異文化理解を中心と考えれば充分である。

Cultural competence の育成として、日本での英語教育という視点から考えて、次の4つのレベルで考えて見るのが適切であろう²¹。

- 1) linguistic level
- 2) sociolinguistic level
- 3) schematic-knowledge level
- 4) psychological level

(1) Linguistic Level

これまでは、linguistic level における能力として、知識 (linguistic competence) だけでもよかったかもしれないが、これからはそれだけでは不十分である。分かりやすく言えば、「ペーパードライバー」では駄目だということだ。そこでこの実践能力 (performance) を育成する際、日本の英語教育で何が不足しているかを具体的に次の4つの領域に分けて検討して見ることにする。

(a) pronunciation

個人的には、日本人の英語の発音は、世界のレベルから見て、世間で考えられているほど劣っていないと思っている。それでももっと訓練が必要であることは否定できない。以前のように何が何でも native fluency をという時代ではないが、日本人の場合、特にかけているのは次の2点であろう。

- 1) 個々の phoneme にこだわるよりは、1つの単語として適切りリズムで発音できること。
- 2) 強弱の区別、特に弱音の処理。

1) に関しては、たとえば、vanilla を例にとると、個々の [v] [l] の正確さより、むしろ、第2音節にストレスを置いて、適切りリズムで発音できるの方が、実際的にははるかに重要である。

2) に関しては、「音節拍子の言語」 (syllable-timed language) である日本語の読み方が、英語を読む際にも出てしまうのが大きな要因である。英語は「強勢拍子の言語」 (stress-timed language) であるから、強いところは、強くゆっくり、弱いところは、弱く早くなる。これも、理論ではなく、実際に発話できるというのが大事であり、これには訓練が必要である。

(b) listening ability

日本人の聴解力は、TOEFL の結果が示す通り、他の国々の学習者と比べて特に弱い所である。聞くことによる情報量の多さと迅速さを考えるとき、この能力は有益であり、言語的に見ても、早い段階から、鍛えておくべき機能である。本来活字導入以前に、音声による導入があるべきである。早い段階から、native speaker の英語であれ、日本人教師の英語であれ、もっともっと、英語を聞かせる機会を作すべきだ。しかも、変にコントロールされたものではなく、できるだけ authentic な英語をどんどん聞かせるべきである。延いては、これが、英語のリズムの体得にも繋がるのである。とりわけ、この件に関しては、「大学入試センター試験」への聴解力テストの導入が急務である。早期の実現を望みたい。

(c) writing ability

今日、様々な英語の変異 (variants) があり、spoken English に関しては、色々な種類の英語を耳にする。しかしながら、David Crystal 教授もある講演で強調していた通り、written English に関しては、極めて「標準的」な方向で統一されると言ってもよい。つまり、教えるべききちんとした「標準」がはっきりと存在するということである。しかも、production を重視すべき今日の英語教育という点からも、大いに力をつけておくべき能力である。

その際、注意すべきことは、日本語の発想による「英語」にならないようにということである。次の文は佐賀大学の英語科のある学生 (TOEFL

570点) のレポートからの一文である。

* The boy who grew up to be an adult tells the reader about the story of his childhood, and this is the style of this work.

この学生の頭の中には、「大人になった少年が子供の頃の物語を読者に語っているが、これがこの作品のスタイルである。」という日本語があり、それを「忠実に」、「英語」に「置き換えた」のである。しかし、これでは、「英語」としては、変な文である。英語が最も重要視する「論理性」(logic)がおかしくなっているし、しかも、「何がどうした」という、結論や中心概念から書いていく英語の発想法に合わない。かなり英語の出来る者でも、つい日本語の発想法が介入する。それが受け入れられる場合と、そうでない場合があるので要注意である。単語の「置き換え」でなく、書きたい内容を、英語の発想に合わせて論理的に作文するという訓練が必要である。そのためには、英作文の指導はもとより、そのモデルとなるべき英文に充分触れさせておくという土台の育成が大切である。

(d) reading ability

この分野に関しては、かなり研究が進んでいるので、あまり追加して言うべきことはないが、ただ、これまでの精読一辺倒から skimming, scanning ができる読み方を訓練すべきである。設問としても、和訳問題よりむしろ文章の内容を問う問題、たとえば、英問英問や要旨を問う問題をもっと増やしていくべきである。

(2) Sociolinguistic Level

Sociolinguistic の分野における研究成果は、最近どんどん発表されていて、中でも、日本人の英語の誤りについての英米人による研究は進んでいるようだ。今回ここで取り上げたいのは、“register”についてである。教室で、しかも non-native speaker から英語を習っているという状況では、どうしても、言語とそれが使われている状況とが

なかなか結び付きにくい。たとえば、アメリカの留学先でこれからお世話になる教授へ、「ていねいな」手紙を書ける大学生はそう多くない。用は足せるかもしれないが、ぶっきらぼうなものが多いというのは、筆者だけの印象ではないと思う。また、以前、これからホームステイとしてやってくる日本の高校の英語の先生からの手紙をかなり不愉快そうに見せてくれたイギリス人の友人がいたが、見ると、極めて colloquial な文体のくだけた英語だった。やはり、これからお世話になる人への第一便の手紙としては、不適切であると言わざるを得ない。このように、“register”の問題は相手とのコミュニケーションを形成する上でとても大事な問題である。これは次の Wolfson の説明通り、外国語教育の重要な要素である。

The ability to use the appropriate register or speech style is of particular importance to language learners.... The choice of items from the wrong style or register and the mixing of items from different styles and registers are among the most frequent mistakes made by learners of a language. (4)

Wolfson は register の不適切さをはっきりと “mistake”と呼んでいる。文法上の誤りは受け入れられても、register に関する誤りは無礼な行動として人間性にかかわる判断をされる。

社会言語学上の問題としては、先程も指摘したが、日本語の用法を英語にも「転移させる」いわゆる、“pragmatic transfer”の問題がある。Wolfson が示しているように、今後このような異文化間での対照社会言語学 (Interactional Sociolinguistics) の研究による比較文化的実証データを英語教育へ応用していく必要がある。

Thus, it appears that the empirical investigation of pragmatic transfer and related work in interactional sociolinguistics have a great deal to contribute to our understanding of why and

how communication breaks down, and how the larger social consequences of such repeated breakdowns take place. Clearly, this area of work is still in its infancy. Much more research into specific areas of pragmatic transfer are needed, and means for dissemination and use of this knowledge must be worked out. (160-161)

(3) Schematic-knowledge level

近年、この“schema”理論がなかなか興味深い^{#2}。日本で育ち、日本語を身につけた人は、脳の中に日本語に関する schema が形成されている。ところが問題なのは、Widdowson も指摘するように、この日本語の schema で英語も解釈してしまうと言う点である (Widdowson 110)^{#3}。たとえば、小学校の先生に対するイメージの差異と言った、単語の connotation のレベルから、家の探し方や借り方、Christmas の祝い方、housewarming party のやり方といった生活習慣に至るレベルまでその範囲は幅広い。日本語の schema しか持たないのものが、外国へ行って経験するストレスの原因は、この schema の違いによるものが大部分である。

単語レベルにおける差異についてはよく取り上げられているのでここでは詳しく述べないが、「日本文化の伝達」という視点から、以下の点を今後考慮したい。

日本独特の「文化」に根差した品物——特に、食料品——を英訳する際、その表現のもつイメージを充分考慮するべきであるということだ。たとえば、「海苔」のことを、sea weed と訳したりするが、これはイメージが悪い。もちろん sea weed は「海草」で、これはれっきとした英語だが、weed では、やはり、「雑草」であり、食べ物としては好ましくない。そのためか、最近では (dried) sea plant とか、sea vegetable という名称で売られている。これなら、ダイエット食品としてもいけそうだ。

ついでながら、日本人の刺身を食べる習慣を誤って “* Japanese people eat a raw fish.” と言う人がいるが、このような表現の英語が英米人に

どのようなイメージを抱かせるか考えて見る必要がある。“eat a raw fish” では、間違いなく「野蛮な」イメージを与える。sushi という英語が定着し、スーパーのフィッシュコーナーでは、sashimi で充分通じるようになってきているアメリカでも、ちょっと田舎に入ると、いまだに、“Do Japanese people eat fish raw?” と、よく問われる。しかもその際、あまりいいイメージではないことは相手の表情から容易に見て取れる。日本人を変な人種だと印象づけないためには、できるだけ良いイメージが残るように伝える努力をしたい。アメリカでは sashimi でよいが、どうしても英語で説明しなければならないならば、sliced fresh fish fillet と「説明」すればどうだろう——魚を生で食べる習慣をもたない人々には、結局「説明的」でしかない——。食料品としては、raw より fresh が適切であり、fillet とすれば、さらにイメージがよく、しかもこのほうが「正確」ではないだろうか。(実際、魚の切身は “tuna fillet” や “sole fillet” という「名札」で店頭では売られている。)

次に、同様なことを、context の点から考えてみたい。たとえば、一般に日本人は人を食事に招待した場合、「何もありませんが、どうぞお召し上がりください。」と、日本語の schema でもてなす。しかし、外国人を招いて、この日本語をそのまま逐語訳してはいけない、とはいうことはもう誰でも知っているため、そんな失敗をしでかす人はいない。しかし、英米人が言う様に、たとえば、“My wife is a good cook, so I hope you will enjoy the dinner tonight.” とまでは、事実、料理のうまい妻を持っている人でも、日本人にはなかなか言えない英語ではないだろうか。先の日本語は、確かに、人をせっかく招待しておいて「何もない」とは、失礼であるし、しかも「何もないのに、召し上がれ」と言うのも、全く非論理的である。しかしこれは紛れもなく、日本人の「謙虚さ」から生まれた表現である。そのような気持ち持った人には、決して、“My wife....” と言う英語は、違和感を覚える。大げさに言えば、そのような英語では、日本人の持つ「謙虚さ」は完全に殺されてしまっ

いる。英語ではそういうのだから仕方がない、というのでは日本人の心情というのは消え去ってしまうのではないだろうか。これからの英語教育は、この各国々の cultural identity を尊重すべきという立場で進めていくべきであるとき、西洋的な論理や価値観だけが尊重されるのは、甚だアンバランスといわざるを得ない。われわれは、これからは何とかこの日本人の identity や価値観を殺すことなく、むしろ理解してもらう方向を探っていかなければならないと思うし、そのような努力こそ、異文化理解の真意であり、また、醍醐味でもあるはずだ⁴。

異なる生活習慣や行事についても、できるだけ「知識」があるに越したことはないが、当然限度があるし、しかも、たとえば、クリスマスの過ごし方一つとっても、国によってさまざまであり、一概にこうだとは断定できない。Alptekin は、schematic knowledge を教えることの重要性和同時に、その際、最も陥り易い危険性として、文化を stereotypical に提示する点を挙げている⁵。

Language has no function independently of the social contexts in which it is used. In the case of English, as a lingua franca, such contexts are as varied as they are numerous. The schematic knowledge of the speakers of such contexts is quite diverse. Hence, to confine English to one of its native settings and, what is worse, to present that setting in a stereotypical manner is not only unrealistic and misleading, but also a disservice to EFL learners.... (141)

教師は、常にこのことを念頭に置き、学生に対し、どのような文化状況にでも対処できるきわめて柔軟な “open schema” を形成する必要があると思われる。

(4) Psychological Level

以上(1)から(3)までの知識がいかにあっても、いざ外国人を前にすると、緊張して、能力の半分も

出せない日本人は決して少なくない。石井敏他 (1979, 1980) の調査結果は、この推測を裏付けている。彼等の調査結果によれば、日本人、韓国人、アメリカ人大学生の中で、外国人を前にしたとき日本人が、一番緊張感を感じるそうである。これは、“communication apprehension” と呼ばれるもので、コミュニケーションを阻害する1つの大きな要因として指摘されている⁶。これは、確かに英語以前の問題であり、経験によってしか解決できない問題ではあるが、余り言語に頼らない low-context culture⁷ である日本人の場合、大きな要因としていつまでも残ると思われる。

II. Cultural Awareness

前章で述べたような cultural competence を指導したり、身につけたりする際に、今後われわれが念頭に置いておくべき点は、Cultural Awareness という言葉に集約できると思う。この語は、Tomalin&Stempleski によれば、次のように定義されている。

Cultural awareness is the term we have used to describe sensitivity to the impact of culturally-induced behaviour on language use and communication. (5)

具体的には、彼等の挙げている項目を少し修正して、次の3点が最も重要と考えられる⁸。

- 1) awareness of the culturally-induced behavior of others;
- 2) awareness of one's own culturally-induced behavior;
- 3) well-balanced sense of culture.

これまでの英語教育は、外国の文化を取り入れることに重きが置かれるという傾向があったが、今後は、同時にわれわれ自身、日本の文化に対しても理解を深め、外国人に理解してもらう方向を打ち出すべきである。Prodromou は、“From Cultural Background to Cultural Foreground”

という論文のタイトルが示す如く、これからは、英語の文化背景ばかりでなく、同時に、学習者の自国の文化に対する知識を育てて行くべきだと主張している。

This article suggests ways of broadening the cultural context of English lessons to include awareness of Anglo-American culture (what is traditionally referred to as the cultural *background*) and at the same time incorporate a greater use of the students' own culture (what I refer to as the cultural *foreground*) (27).

英語を媒体とするにしても日本人としての cultural identity も殺すことなく produce していく道を考えるときであり、しかもそのような相互理解を基盤にした情報伝達こそ、真の意味でのコミュニケーションと言える。さらにその際、ある特定の文化にのみ重点が置かれたり、尊重され過ぎたりするのは、却って、弊害となってしまう。バランスのある文化感覚こそ文化教育には大切であり、異文化理解の目的もそこらあたりにあるといえる。

CONCLUSION: From the "Melting Pot" to the "Salad Bowl"

Smith (1983) は "English...is the means of expression of the speaker's culture, not an imitation of the culture of Great Britain, the United States or any other native English speaking country." (35) と言っているが、英語はすでに英米人の手を離れ、世界のあらゆる人々の共有物となっている。しかし、ここで注意すべきは、この場合、英語は、「国際補助語」という範囲は出ず、決して「世界語」(world language) ではないという視点もはっきり認識しておくべきである。しかも、さまざまな伝達方法の1つにすぎない。英語は単に a means of communication であり、the means ではない。そのような視点が教え

る側にはっきりあれば、決して、「英語帝国主義」とか「英米文化崇拜主義」になることはないはずだ。

異文化理解の態度を育てるとするのは、現地(各国)の言葉や文化を尊重するということである。たとえば、英語を知っていればほとんど世界中を旅行できるだろうが、たとえば、フランスやドイツでは片言でも、現地の言葉で会話をしたい。現地の言葉が使えないので、英語で申し分けない、という位の謙虚さと相手の文化に対する敬意が、異文化理解の本当の態度ではないだろうか。

歴史が証明するように、異質なものをとり入れてこそ、進歩がある。Diversity をとり入れてむしろ、豊かにしたい。

多文化社会のアメリカは、少し前までは、"melting pot" と呼ばれていたが、最近では、"salad bowl" と呼ばれている。アメリカのサラダは、ご存じのように、レタス、トマト、ブロッコリー、セロリ、ピーマンなどが、あたかも自分の identity を保持しつつ、1つのボールの中に納まっている。現在のアメリカ社会もまさに salad bowl のように、各民族の cultural identity を尊重しつつ共生を目指しているし、事実、もっとも成功している例ではないだろうか。Aguero が、*Daily Fare: Essays from the Multicultural Experience* の preface で指摘しているように、"differences" を尊重し、文化の差異よりも、むしろ、人間として "common" な部分の存在を慈しむ方向へ向かうべきときであろう。

These essays begin to show us that we do not have to choose between being purely ethnic or totally assimilated; that instead we may struggle to pay tribute to our differences and cherish what we have in common without compromising either. (x)

地球全体が、1つの大きな "Salad Bowl" になることを目指した異文化理解教育でありたいと願う。

NOTES

¹¹ Canale は, "From Communicative Competence to Communicative Pedagogy" の中で, communicative competence として次の 4 つの能力を設定している。(1) grammatical competence (2) sociolinguistic competence (3) discourse competence (4) strategic competence.

¹² Schema 理論についての詳細は, Taylor 他 (1981) を参照のこと。

¹³ *Aspects of Language Teaching* (1990) の中で, Widdowson は言語を習得するのに必要な 2 つの知識として, "systemic knowledge" と "schematic knowledge" を挙げている。

¹⁴ この種の興味深い例として, 日野は, イスラム人学生の例を挙げ, 「自己の価値観を捨てぬ」「毅然たる態度」と評価している。たとえば, 「一日一まで着ていただけませんか」とその学生に尋ねると, 彼は, 英米的な "Sure" や "Certainly" ではなく, "I don't know, but I will try." と答えたということである。その学生によれば, イスラム人にとって, 未来はすべてアラーの神が決めることであるから, どうなるかわからない。何か予期せぬことがあって行けなくなることもあるかもしれないから, きわめて消極的な返事しかできないとのことである。

¹⁵ Samovar によれば, 異文化理解の障害になるものとして, (1) projected cognitive similarity (2) stereotyping (3) ethnocentrism を挙げている (85-86)。

¹⁶ 石井によれば, 異文化コミュニケーションにおける日本人の問題点として, 第一に, communication apprehension を挙げている。他に, 「対人欲求」(interpersonal needs), そして, self-disclosure の問題があると言っている。

¹⁷ Edward Hall は文化を「状況依存度の高い」"high-context culture" と状況依存度の低い "low-context culture" に大別している。

¹⁸ Tomalin & Stempleski は, 次の 3 点を挙げている。1) awareness of the culturally-induced behaviour of others; 2) awareness of one's own culturally-induced behaviour; 3) ability to explain one's own cultural standpoint. (Introduction 5)。

Works Cited

- Aguero, Kathleen, ed. *Daily Fare: Essays from the Multicultural Experience*. Athens: U of Georgia P, 1993.
- Alptekin, Cem. "Target-Language Culture in EFL Materials." *ELT Journal* 47/2 (April 1993): 136-143.
- Canale, M. "From Communicative Competence to Communicative Pedagogy." *Language and Communication*. Ed. J. C. Richards & R. Schmidt. Longman, 1983.
- Hall, Edward. *Beyond Culture*. Doubleday, 1977.
- 日野信行 「『通じればよい』を超える会話力とは」『英語教育』(1995) 8月号 8-10.
- 石井 敏「コミュニケーションを成立させる条件」『英語教育』(1995) 9月号 11-13.
- Prodromou, Luke. "From Cultural Background to Cultural Foreground," *Practical English Teaching* (June) 1992: 27-28.
- Samovar, Larry A. & Richard E. Porter, and Nemi C. Jain. *Understanding Intercultural Communication*. Wadsworth, 1981.
- Smith, Larry E. *Discourse Across Cultures*. New York: Prentice-Hall, 1987.
- , ed. *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon, 1983.
- Taylor, S. E. & J. Crocker. "Schematic Bases of Social Information Processing." *Social Cognition: The Ontario Symposium*. Eds. E. T. Higgins & C. P. Herman. Lawrence Erlbaum, 1981. 89-134.
- Tomalin, Barry & Susan Stempleski, *Cultural Awareness*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Wallace, C. *Learning to Read in a Multicultural Society*. New York: Prentice-Hall, 1988.
- Widdowson, H. G. *Aspects of Language Teaching*. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Wolfson, Nessa. *Perspectives: Sociolinguistics and TESOL*. New York: Newbury House, 1989.